

# 暫定編年の第二次修正について

高 宮 廣 衛

筆者は1978年に沖縄諸島と九州地方との対比を試みた編年試案（新石器時代）を作成したが（註1）、その後、新しい資料の発見があり、試案の一部を修正した（註2）。それから1年が経過し、その間、新知見も得られたので、再度、微調整を行うことにする。

まず、第一点は新型式の追加で、真栄里式を後Ⅰ期に追加する。糸満市真栄里貝塚の土器を標式とするもので、同遺跡調査団による命名である。甕形土器は夜臼的あるいは板付Ⅱ式系の特徴をよくとどめているようで（註3）、暫定編年では後Ⅰ期（弥生前期）中ごろに位置づけられる。現在、本遺跡の調査報告書を作成中であるが、本遺跡の発見により、弥生前期の手掛りが得られるようになった。

また、後期遺跡のうち、その後、時期が明確になったものに宇堅貝塚や阿良貝塚がある。伴出の弥生式土器により、前者（註4）は後Ⅱ・Ⅲ期、後者（註5）は後Ⅱ期に比定され、弥生関係の資料も徐々にではあるが増加しつつある。

次に暫定編年の枠組みについて若干ふれておきたい。これまで考古学界では縄文草創期を認める6期区分法と、それを認めない5期区分法が併用され、その場合、前者の草創期は後者では早期初頭（註6）と表現されることになる。1978年、前記編年試案を作成したころも草創期の問題については未だ前述のような見解の対立があり、暫定編年では保守

的な立場をとることにした（第1表）。しかし、昨今、草創期を認める編年が一般化しつつあり、それに対比させた場合、筆者の暫定編年をどう改めるべきか、第2表はその試案である。

ところで、6期区分法を採用した場合、爪形文系統のヤブチ式や東原式を草創期（前Ⅰ期）に比定すべきかという問題に直面するが、当面、渡具知東原の炭素14年代（6,670±140 Y. B. P.）に従い前Ⅱ期（早期）初頭に置くことにする。ヤブチ式土器を包含する渡具知東原遺跡の最下層は海面下に堆積したヘドロ層であり、古川博恭氏の地質学的所見によると、この種のヘドロ層は九州～沖縄間において、10,000～6,000 Y. B. P. を示すといわれ、渡具知東原ヘドロ層採集の試料年代（6,670～6,450 Y. B. P.）も上記年代の範囲内にある。

ところで、ヘドロ層は当時の生活層ではなく、海面下の堆積層であり（註7）、それに含まれる文化遺物は二次堆積に由来するものである。したがって、本来の生活面は当時水没をまぬがれた周辺部のどこかにあるはずであり、それを突き止め、そこから試料を採取すれば、より真実に近い実年代が得られるものと思う。

しかし、もし仮りに渡具知東原のヘドロ層の前記炭素14年代が、そこに含まれる爪形文土器の年代にも適用できるという場合、長崎

第1表 沖縄諸島の暫定編年

九州	暫定編年	土器型式	沖縄諸島発見の縄文・弥生式土器	その他の年代資料	現行編年
縄文時代	早期 I	ヤブチ式土器 東原式土器	爪形文土器	ヤブチ式 6670±140Y. B. P. 東原式 6450±140Y. B. P.	早期
	前期 II	曾畑式土器 条痕文土器 室川下層式土器		曾畑式土器 条痕文土器	
	中期 III	?			
	後期 IV	伊波式土器 荻堂式土器 大山式土器 室川式土器	出水系土器 市来式土器	伊波式 (熱田原) 3370±80Y. B. P. 伊波式 (室川) 3600±90Y. B. P.	前期
	晩期 V	室川上層式土器 宇佐浜式土器		宇佐浜式は黒川式並行とみられる	中期
弥生時代	前期 I	真栄里式土器	板付Ⅱ式 亀ノ甲類似土器		後期
	中期 II	具志原式土器	山ノ口式土器		
	後期 III	アカジャンガー式土器	↑ 免田式土器 ↓	アカジャンガー式は中津式並行とみられる	
古墳時代 平安時代	IV	フェンサ下層式土器		類須恵器	

※「フェンサ下層下層式は城時代初期」とする見解もある。

第2表 沖縄諸島の暫定編年

九州	暫定編年	土器型式	沖縄諸島発見の九州系土器	その他の年代資料	現行編年
縄文時代	草創期 前期 I				早
	早期 II	ヤブチ式土器 東原式土器	爪形文土器	ヤブチ式 6670±140Y. B. P. 東原式 6450±140Y. B. P	
	前期 III	曾畑式土器 条痕文土器 室川下層式土器	曾畑式土器 条痕文土器	曾畑式(渡具知東原) 4880±130Y. B. P.	中期
	中期 IV	?			
	後期 V	伊波式土器 荻堂式土器 大山式土器 室川式土器	出水系土器 市来式土器	伊波式(熱田原) 3370±80Y. B. P. 伊波式(室川) 3600±90Y. B. P.	前期
	晩期 VI	室川上層式土器 宇佐浜式土器		宇佐浜式は黒川式 並行とみられる	中期
弥生時代	前期 後期 I	真栄里式土器	板付Ⅱ式 亀ノ甲類似土器		後
	中期 II	具志原式土器	山ノ口式土器		
	後期 III	アカジャンガー式土器	免田式土器	アカジャンガー式は 中津野式並行か	中期
古墳時代 平安時代	IV フェンサ下層式土器		類 須 恵 器		

※「フェンサ下層式は城時代初期」とする見解もある。

県福井洞穴発見の爪形文土器の年代（約11,000年前）（註8）と4,000年前後の開きが生ずることになる。その場合、渡具知東原のヤブチ式の年代は辺地における下限年代を示すものと解する以外にない。つまり、福井洞穴の爪形文土器の年代からほど遠からぬ時期に伝来したものが、縄文早期まで存続したと解するわけである。その場合、渡具知東原遺跡は沖縄における爪形文土器の終末期の遺跡ということになる。第2表ではその点を加味し、ヤブチ・東原両型式を前Ⅱ期前半に位置づけながら、点線でもってその初現が前Ⅰ期に遡る可能性を示しておいた。文化要素は消滅してから伝播することはあり得ないから、沖縄諸島への爪形文土器の波及も福井洞穴あるいは南九州の上場遺跡に近い年代を考えるべきかとみている。

次は6期区分法における前Ⅴ期（縄文後期）の土器型式であるが、暫定編年表では枠組みの都合上、伊波式系列のみを表示した。しかし、その他にカヤウチバンタ式土器や仲泊式土器が知られている。両者とも伊波式系列とは異なる、それぞれ別系統の土器である。それを表示すると第3表のようになる。両型式の詳細は拙稿「沖縄諸島の土器」（註9）にゆずるが、カヤウチバンタ式土器は荻堂期に発現し、前Ⅵ期（縄文晩期）まで持続する長期の型式で、その間、伊波式系列などの影響を受けながら、徐々に変化していく。カヤウチバンタ式に特徴的な文様というものは現在のところ知られておらず、また、本型式の単純遺跡というのも未だ報告を聞かない。

伊波式系列のうち大山式と室川式の間には編年上のギャップがあり（第3表）、両者は現

第3表 沖縄諸島の前Ⅴ期の土器（6期区分法による）

縄文 中期	前 Ⅳ 期	?
縄文 後期	前 Ⅴ 期	伊波式土器 荻堂式土器 大山式土器 室川式土器 カヤウチバンタ式土器
縄文 晩期	前 Ⅵ 期	室川上層式土器 宇佐浜式土器

面縄前庭式土器  
仲泊式土器

↓

時点では直結できないが、1・2型式挿入すれば連結するものと思われる。カヤウチバンタ式土器も上記の空白部分が欠けており、同部が埋まれば最終的な細分編年が可能となろう。

仲泊式土器は現在のところ祖型も後続型式も不明である。口縁部が肥厚する点はカヤウチバンタ式に通ずるものがあるが、肥厚の形態や尖底器形である点を考慮すると、むしろ相違の方が目だつのである。両者は別系統とみるべきであろう。尖底器形という点を勘案すると、編年的には伊波式に先行する時期を与えるべきかと思う。

面縄前庭式土器は具志川島での層位的発掘を参考にすると、仲泊式に先行する土器である(註10)。そこで第3表では仲泊式に先行する時期を与えた。面縄前庭式がどこまで古く遡るか、現時点でその上限をおさえることはできないが、あるいは前Ⅳ期(縄文中期)を代表する型式かとも考えられる。底部が尖底をなす点はこの土器の古さを暗示するものであろう。渡具知東原曾畑層出土の面縄前庭類似土器(註11)との関係など、今後の重要な検討事項である。

面縄前庭式土器をこれまで奄美の土器と考えてきた。しかしながら、奄美・沖縄両諸島における近年の出土例から、奄美に分布の中心をもつ土器ではなく、むしろ両諸島に万遍なく分布する土器のように見受けられる。とすると、面縄前庭式土器は奄美を代表する土器というより、両諸島に共通する土器ということになり、将来、そのような位置づけが要求されるかもしれない。

このように奄美・沖縄両諸島に共通に分布する土器の中から、それぞれの諸島に固有の土器が派生するのではなかろうか。このよう

な両諸島に共通する土器に、南島中部圏を代表するような適当な型式名を与えたいのだが、今は思い浮かばない。嘉徳式もあるいはこの種の土器かとみられる。沖縄特有の伊波式土器も、このような共通の土器の中から派生したものであろう。

ところで、暫定編年の前期については、近年の考古資料から、縄文時代(註12)あるいは縄文文化時代(註13)として捉える方向に転じつつあり、近い将来、上記の時代名称に落ち着くものと思う。

問題は次の後期であるが、どのように把握すべきか、性格が今一つはっきりしない。筆者は昨年まで、続縄文的なものかと密かに考えていた。昨年11月刊行の『縄文文化の研究〈6〉』(註9)では、その間の事情を下記のように婉曲的に表現した。

ところで近年、九州の晩期土器の南漸変容形とみられる資料が、わずかではあるが渡嘉敷島の阿波連浦貝塚あはのへんうらほか数遺跡で発見されている。この土器の有する特徴から九州の土器が南島において変容したことを示す確実な資料であるが、発見例が少なく、伝播の時期や過程がいま一つ明らかでない。他方、この土器は器形以外の諸特徴が、次の沖縄後期の土器に酷似し、このことは何かはなはだ重要な問題を含んでいるように思われる。両者の間に系統関係が成立するかどうか、これも緊急課題の一つである。

上記の発想は阿波連浦貝塚の縄文晩期土器にヒントを得たもので、この土器がいわゆる沖縄後期の土器と焼成・器色・器厚等が酷似し、無文の胴部破片を混ぜた場合、現時点では両者を識別することは困難である。このような両者の類似性から、系統関係の有無を

検討してみる必要があるように思う。もし、前記阿波連浦の晩期土器と沖縄の後期土器の間に系統関係が成立するとすれば、後者は続縄文式土器としての位置づけが可能となる。

ところで、糸満市の真栄里貝塚が小田富士雄氏のご検討により、板付Ⅱ期に比定できることが分った。甕形土器は前にも記したように同期の特徴をよくとどめているという。しかし、土器そのものは全般的に著しく変容していて、九州からストレートに入ってきた状況を示していない。このように土器が変容しているということは、何か重要な事実を内包しているように思われる。つまり、弥生式土器文化の受容を示唆するものではなからうかと受取れるのである。もし、弥生式土器文化の定着が確認された場合、沖縄のいわゆる後期土器文化は12世紀前後まで存続するわけだから、この時代を弥生と続弥生に区分せねばならないことになる。

あと一つ、この時代の性格把握を困難にしているのは、具志原貝塚のような後Ⅱ期（弥生中期）における尖底土器の存在である。この土器の祖型を何に求めたらよいか、現在のところ皆目見当がつかない。糸満市真栄里貝塚のような弥生式土器からの派生は考えにくい。あるいは先述の阿波連浦貝塚の縄文晩期土器の流れをくむものか、それとも縄文式・弥生式土器の辺地における融合の結果生じた南島独自の新出の型態なのか。とに角、この尖底土器の素性がはっきりすれば、後期文化の性格も、より鮮明になろう。

沖縄の後期文化については上記三つの可能性が考えられるが、強いて意志表示をすれば、私としては弥生・続弥生の方に少し分があるのではないかと推測している。しかし、確実

なことは将来の資料を待つしかない。

なお、現時点でみると、読谷村の渡具知木綿原遺跡は奄美のサウチ遺跡のような南下弥生前期人の、沖縄諸島における拠点の一つではなかったか、と推察される。

最後に、終末期の土器型式について補記しておきたい。フェンサ下層式土器を先史時代終末とみる立場と、それをグスク時代期とする二つの立場がある。いずれにしる、現在のところフェンサ下層式が城址系土器に直結するとは思えない。おそらくフェンサ下層式の次に何型式かあって、そのような変遷を経て、次のいわゆる城址系土器に移行するものと考えている。終末期の型式の一つに恩納村熱田貝塚などで検出された鍋形の瘤付土器は城址系に通ずるものがあり、それらが最終末に位置づけられる可能性を、数年前から提言し、かつ口頭発表なども行ってきたが、南島考古第7号では詳述する余裕がなく、割愛したために誤解を生じている面もあり、ここに補足しておきたい。

#### 註

1. 高宮廣衛 「沖縄諸島における新石器時代の編年〈試案〉」 南島考古第6号 沖縄考古学会 1978
2. 高宮廣衛 「編年試案の一部修正について」 南島考古第7号 沖縄考古学会 1981
3. 小田富士雄 「糸満・真栄里貝塚の土器、弥生前期に間違いはない」 琉球新報 1983. 2. 17 (朝刊)

4. 『宇堅貝塚群・アカジャンガー貝塚発掘調査報告』具志川市教育委員会 1980
5. 沖縄県教育委員会 『伊江島阿良貝塚発掘調査概報』沖縄県文化財調査報告書第42集 1982
6. 鎌木義昌「縄文文化の概念」『日本の考古学Ⅱ〈縄文時代〉』河出書房 1965
7. 古川博恭・大城逸朗 「渡具知東原遺跡周辺の地形・地質について」『渡具知東原』読谷村教育委員会 1977
8. 芹沢長介 「日本旧石器時代の編年について」考古学ジャーナル No.167 1979
9. 高宮廣衛 「沖縄諸島の土器」『縄文文化の研究〈6〉』雄山閣 1982
10. 『具志川島遺跡群第四次発掘調査報告書』伊是名村教育委員会 1981
11. 高宮廣衛 「上層の土器」『渡具知東原』読谷村教育委員会 1977
12. ① 江坂輝彌 『考古学ノート 2 〈縄文文化〉』日本評論社 1957
- ② 芹沢長介 「縄文時代」『考古学ゼミナール』山川出版社 1976
- ③ 三島 格 「螺蓋製貝斧」『賀川光夫先生還暦記念論集』別府大学考古学研究室 1982
13. 國分直一教授の教示による。